

「龍雄は本當に死んだのか、

山の上の女を寄せせ」

黒い襟卷をした女が、義母であるような不像な様な、ハッキリ解らいのだ。

巡査が覗く。

僕は唾を吐きかける。

太鼓やラツバの音が聞える。

それが活動か芝居の樂隊なのだけれど、初めの間僕は、僕の氣分を引き立てる爲に、警察の前邊りで態とやつて呉れてるのだと思つてゐた。

紡織工場のフルイトが、無茶苦茶に長く大きくとどろく。

それは僕をとむろふ爲だ。

足首に鐵枷をはめられ、鎖で柱につながれた初戀の女の幻想が湧く。

彼女は髪を振り亂して泣き叫んでゐる。

格子の外に連れて來て、僕に一目逢はすれば、二人の精神状態は平衡になるのと思ふ。